

「より快適な生活を提案する製品づくり」にこだわる

大倫企業株式会社 奈良県大和高田市

住宅関連産業は、住宅着工戸数の全国的な伸び悩みの影響を受けてじり貧状況が続いている。

大倫（だいにん）企業株式会社は、そのような中において「風呂フタ」の製造で業績を伸展させ、全国屈指のシェアを誇っている。

また、常に先を見据え、建築用資材など新たな分野にも積極的に事業を展開している。

会社概要



会社名：大倫企業株式会社
所在地：奈良県大和高田市東中 99-4
設立：昭和 47 年 9 月
電話：0745-56-9333
FAX：0745-52-9345
資本金：1,000 万円
社長：石川 俊夫
従業員：70 名
事業内容：プラスチック押し出し成型、プラスチック射出成型、発泡押し出し成型および加工



昨年完成した第 2 工場

会社設立と主力製品である「風呂フタ」

大倫企業株式会社は昭和 47 年 9 月に大阪府八尾市にて設立され、その後場所が手狭になったことを機に昭和 58 年に東大阪市へ、そして平成元年 7 月、現在の大和高田市に移転した。

同社は高田に移転した一年後、平成 2 年 7 月には日本工業規格（JIS）標示許可工場、3 年 11 月には製品安全協会認定工場となるなど、認められた工場として順調に業容を拡大させていった。さらに、平成 14 年 6 月には新製品の生産体制工場として大和高田市市場に第 2 工場を完成させた。

同社の扱う主製品はプラスチック製品である。そのプラスチックと石川社長との出会いは会社創業前にさかのぼる。

サラリーマンであった社長は 22 歳の時に転身、最初はある会社の下請け作業（倉庫管理）を行っていた。たまたま、その会社が扱っていたものがプラスチックであり、それが今の同社の基盤となっている。

さて、同社が主力としているのがシャッタータイプの「風呂フタ」である。風呂のフタはプラスチック製の一枚板だと割れやすいというデメリットがある。

そこで、社長は細長くパイプ状に成型した筒を横に並べてくっつけることでシャッターのように折り畳め、強度も増す風呂フタの開発に成功した。

浴槽に 70 の湯をはった状態でこのフタを置き、1 時間経過した段階でも 30 kg の重圧に耐える強度をもっている。また、SG マーク（製品安全協会認定マーク）の認可を同種の製品としては日本で初めて受けた。

同社が開発した風呂フタは大手スーパーへの売り込みに成功し、その後次々と大手量販店とも契約を

取り付けることができた。現在では販路は大きく拡大し、大手量販店をはじめ大手住宅メーカーや大手浴槽メーカーなど15社と取引をしている。



同社の主力製品シャッタータイプの「風呂フタ」

社長の信念と製品への絶対の自信

社長は「ものづくりの基本は努力すること。ものづくりをとことん追求して、低価格で良い製品を市場に出すことが私の使命です」と自信をもって語る。

これは、「基本的に良い商品には、自然と競争力や購買力が付いてくる」という考えに基づくものだ。したがって、同社には営業社員は一人もいない。

同社の風呂フタは、大手住宅メーカーや住設メーカーへOEMで供給しており、製造から最終梱包まですべて自社で賄っている。商品はノー検査で量販店へ出荷され大手のチェックははいらない。これは、同社の品質管理が非常に優れていることの証ともいえよう。

また、「製造工程に工夫を凝らし生産性を高め、出来る限り製造コストを引き下げることによって、海外からの安い輸入品にも価格競争で勝てる自信がある」(石川社長)という。

新たなオリジナル製品の開発

現在、同社の販売額に占める製品シェアは風呂フタが55%と最も多く、そのほか、クーラーの配管カバーやシステムキッチンの食器棚、下駄箱の収納棚、洗面所の蛍光灯カバーなど住宅関連用途として使われている。

しかしながら、風呂フタの市場は、これからはあまり大きな拡大は期待できないと考え、新たな製品の開

発にも積極的に取り組んでいる。

特に社長、従業員が一丸となり、最も力を注いだのが、産業廃棄物を出さない100%リサイクルという理想的な製品の開発であった。

できあがったのは、コンビニ弁当の入れ物などのプラスチック素材を細かく砕き、それに木の粉を混ぜ合わせて作る建築用の資材で、現在、地球に優しい製品として高い評価を受けている。



リサイクルされた建築用資材

プラスチックが混じっていても木の成分が50%を超えると木材とみなされる。したがって、木の成分を半分以上に高めることによって、この製品で住宅を建築しても木造住宅となる。

また木材と違い、絶対に腐らない商品として将来柱や椽に替わるものと考えている。そしてさらに住宅関連に留まらず、大きく分野が広がるものと期待している。

常に先を見据えた事業展開

石川社長は設備投資にも積極的で、常に最新設備を導入する。それは、たとえ5年間は儲けがなくても、5年先以降の将来を見据えた事業展開を考えての事だ。

業績が好調なため、昨年6月に完成した同社の第二工場もすでに飽和状態になり、手狭になってきた。

石川社長は、さらなる発展を目指して新しい工場建設を目下検討中である。(丸尾、井阪)